



やまもと・しゅう

1964年大阪府生まれ。20代後半に日本を飛び出し、ニューヨークで3年間暮らす。帰国後、ラジオDJとして活動。現在はTBS系ラジオ『全国こども電話相談室・リアル』やNHK教育テレビ『バリバラ〜障害者情報バラエティー』の司会を務める。小学校のPTA会長を5年間務め、著書『レモンさんのPTA爆談』『PTA会長レモンさんの子育てビタミン標語』の印税は、自ら設立した子どもたちのための基金「レモンさん基金」に全額寄付。エイズ予防啓発や献血啓発のリーダーも務める。

## この人に聴きたい

文◎前川太一郎 写真◎川本聖哉

# 山本

ラジオDJ

# シユウさん

ラジオDJ、テレビ番組の司会として活躍中の山本シユウさん。「We are シンセキ！」を合言葉に、人とのつながりを大切にしながらさまざまな活動やボランティアに取り組んでおられます。

### 自分ができる範囲で諦めない

——東日本大震災の直後に「ラジオバトン・プロジェクト」をスタートしましたね。

僕は阪神・淡路大震災を経験しているのですが、まず被災者の方々が正確な情報を得ることが大切だと考えました。ラジオDJなので被災地のラジオ局に知り合いがたくさん

さんいますが、みんな不眠不休で家にも帰らず状況を報告していました。けれど被災地には受信機（ラジオ）がない。そこで全国のラジオ局に呼び掛けてラジオとライトと、電池を集め、被災地へ届けに行きました。ためらいはなかったですね。仲間たちと「とにかく行こう！」と。阪神・淡路大震災のときに「もっと行動すればよかった」という後悔が

あったから。僕のように自由に動ける人間と違って、勤めていて動けなかった人は悔しかったと思います。でもその分、次の機会には絶対に行動できると思いますよ。

——仮設住宅ではカラオケ大会も開いたそうですね。

人間の幸せの最低条件は三つだと僕は思っています。①生きていけるだけの食べ物、②理解者⇨家族や仲間

### ③笑い、です。

福島県相馬市の仮設住宅でカラオケ大会を開いたとき、イントロが流れるとふいにギャグっぽく語り出した肝っ玉母ちゃんがありました。「家は流され、財産も流され、それでもどういうわけか流されなかったのは旦那だけ〜」ものすごいブラックジョークですが、会場は大爆笑でした。笑いの力はすごいです。どんな困難があっても、笑顔や笑いは人の心から力を引き出します。

——ボランティア活動を続ける心構えとは？

日本人はボランティアを偽善的な行為と疑う人もいます。実際をどういう人もいるかもしれませんが、何もできないよりはいいかもしれない。ただマズイのは、ボランティアを「やってあげている」と上から目線的に考えること。あくまでもまずは「自分のさせてもらいたいこと」であり、「喜びである」ということを忘れないように。ボランティアは自分が幸せになるチャンスだとも感じて

います。つまり、必要な「お節介り」です。被災地に行ったりエイズ予防啓発など多くの活動をしていきますが、最初に必ずボランティアアメンバーに伝える言葉があります。「今、自分ができることを、できる範囲で、諦めないで！」

僕ら昭和時代に育った人間には、「0か100か」「正しいか正しくないか」と極端に考えるチップ（ICチップのような）が教育によって埋め込まれていて、「100%できないならやめよう」となりがちです。けれど、たとえ1%でも、できることがあるのならやったほうがいい。

### 近所のおっちゃんらが教えてくれた優しさ

——シユウさんが「We are シンセキ！」を提唱する理由は何ですか。

昔はすごく短気でした。車を運転していて無理に横入りしてくるやつは追い駆け回してましたもん。だけど、もしその相手が友だちや親戚だったら、「お〜!? お前

ボランティアは自分が幸せになるチャンスです。  
基本は「できることを、できる範囲で、諦めないで！」



かあ！危なかったで〜」って、身内やと思った瞬間、急にフレンドリーな態度に変わりますよね。何より気持ち

が楽になる、つまり不幸から幸福に戻る。これに気付いたのは35歳のときです。

僕は大阪の長屋育ちで、両親は毎日一生懸命働いていて、ほとんど家にいませんでした。その代わりに近所のおっちゃんやおばちゃんが世話をしてくれた。本当の親戚のように心配してくれたから、人のつながりの大切さや愛情、優しさを学ぶことができました。それに、自分の命のバトンをさかのぼって考えると、みんなどこかでつながっているはず。だから人はみなシンセキなんですわね。

——PTA会長として活動していたのはその影響？

そうですね。でも最初は断ったんですよ。「仕事柄スケジュールが定まりにくいし、PTAって柄でもないし」って。でも全員に断られてまた僕のところへ頼みに来たんです。正直「自分の子どものためのPTA活動を誰も引き受けないの？」と驚いて、こりゃいかんと思いついて、こりゃいかんと思いついて、引き受けることにしました。

PTA役員のお母さんたちは仕事をしつつ、自分の時間を犠牲にして学校のお手伝いをしています。子どもたちにも知らせたかった。子どもたちが大人になったときにPTAや地域活動の大切さが分かるようにね。

でもそのためには、子どもたちにとって身近な存在にならないといけない。僕は度付きサングラスに茶髪。まるで不審者です(笑)。爽

やかさが足りないのかんきつ系のレモンをかぶった「レモンさん」というキャラクターをつくりました。入学式も卒業式もスーツ姿にレモンのかぶり物。「なんだアイツ。ふざけてんのかー」と思う親もいたでしょう。

でもね、最初にレモンさんを受け入れたのは子どもたちでした。「コイツ、本気や〜」と思つたみたいです。次第に親たちも認めてくれました。

——まとめ役は大変ですね。

シンドイことをやるときこそ楽しくやらないとね。会議でも、とにかく硬い雰囲気にならないようにみんなを笑わせていました。「お、髪切つたの？似合うわ〜。でもイマドキ聖子ちゃんカットつてないわ」と突っ込んでみたり(笑)。

あとはとにかく1対1で話をしました。AさんとBさんがうまうま喋って話せば、まずAさんを誘って話を聴く。「そうか。それは腹立つな。でもあの人も頑張ってるやん」と水を向けると「そ

うね、頑張ってるわよね」と言う。憎しみだけでなく感謝の気持ちがあることに気付かせるのです。Bさんには「Aさんが感謝してたよ」と話す。嫌な気はしませんよね。そうやって個別に話を聴いていきました。遠回りのように見えますが、組織を固めるには、一人ひとりの心に「理解されている」という「安心」を増やすことが実は一番近道なんです。

職場で人を育てるのも同じだと思えます。健常者という名のもとに僕らはひどくくりにされていますが、物覚えの悪い人、段取りがうまくない人、さまざまです。でも失敗して責められたらチャレンジできなくなります。だから人を指導する立場の人は部下と対話して、各々に適したやり方をつくってほしい。そんな上司なら誰もが安心してついていくでしょう。かっこいい大人は優しいのです。みんな誰かに支えられて生きているシンセキなんです。今の社会にある憎悪の連鎖は断ち切って、諦めずに、今できることから少しでも変えていきませんか？

——最後に生協へのご要望をお願いします。

長年利用していますが、妻は「あと一品欲しい」ときにとっても便利な商品があつてよ。安全に気を配っているの で安心して食べられますしね。ただ、「紙の注文用紙(OCR)は記入しにくいので、改善してほしい」そうです。妻に代わってお願いします(笑)。

PRESENT



山本シュウさんの著書『PTA会長レモンさんの子育てビタミン標語』(小学館、1,260円・税込み)を、サイン入りで3人の読者にプレゼントします。ご希望の方はご応募ください。締め切りは3月21日(当日消印有効)です。当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。